Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

037

乳幼児における音楽行動の発達課程「１９」
唱歌について　その２

名鉄学園　桂幼稚園
大里修二

問題　第24回大会から述べてきた当題目研究１～６では“ことばの誕生”を参考に、音楽行動を録音・観察という方法でアプローチし、７～９では音楽行動における、定説と異なるデータの提示。10～11では音楽行動観の変遷と母子相互作用、生態学的アプローチによる音楽行動について触れ、12～14においては、発達課程と実践について触れ、音や音楽に対して、未分化で混沌とした、このままの状態でその活動を楽しむところに、幼児の音楽教育の真の姿があるのではないかとし、実践Ⅰ～Ⅳという実践例を示し、16では、音楽行動研究の黎明期を考察し、17では、これらの流れの中から音楽行動の発達課程（当題目研究）を踏まえたうえでの「幼児の音楽教育」における「育」について、考察し、18では「育」についての実践例として、唱歌を取り上げた。今回、19では「唱歌その２」として、18でのウドン唱歌・ドンドン唱歌の発展系と、若駒の舞唱歌を取り上げる。

結果と考察

唱歌と子ども達（幼稚園児・小学生）との出会いや、幼稚園・小学校での導入の歴史は18で述べたが、前回述べたウドン唱・ドンドン唱は、当園児の母親達によって、ウドンコドン唱となり、発展の形をみた。※１

５年度年長児は、18で述べた園生活を終了し、３月に卒園児となった。さて、６年度年長児に関してであるが、彼等は一学期（４～７月）意図的に唱歌に触れるということはしてこなかったが、５年度年中児ということで、又７月の桂祭り等で、生活全体の雰囲気として唱歌に、一般の園児よりは接していたかもしれない。８月に私自身としては横笛セミナーで、若駒の舞を、子ども塾の中で取り上げた。※２　９月、年長児担任のミーティングで、10月の運動会では若駒の舞を自分達流にアレンジして取り上げたいとの声が上がったので、正調若駒の舞も参考にして、教師側からの叩き台を作った。　※３

10月の運動会は、名城公園で行なったので、当日は名古屋城・城の堀・城の石垣等のロケーションの中での若駒の舞が、大変盛り上がり、感動の感想文が父母から多々寄せられた。10月21日の教師対象のセミナーでは、桂若駒の舞を※４、参加者全員で各パート演奏するとの試みをした。本格的（正調）な若駒の舞が、すぐに楽しめた。見学していた園児の手拍子が、完全に合っていた。等の感想が寄せられた。運動会後は特に若駒の舞は取り上げなかったが、12月の生活発表会のオープニング時の、音と動きのパフォーマンスの中での足踏み奏の中に、この若駒の太鼓パートを入れてみた。※５

生活発表会後も、特別若駒の舞を取り上げはしなかったが、12月15日素晴らしいドラム奏を耳にした。※６よくよく聞いてみると、若駒の舞がベースになっていた。又園生活に於いても、音楽活動に於いても、あまり積極的とは思えず、室内のそれも隅っこで遊んでいる子ども達の演奏なので、余計びっくりし、感動があった。三学期になり、２月４日の作品展に向けて園全体が活動を始めてきた。１月20日午後１時から25分程だが音楽の集いを開いた。ここでは、12月15日のドラム奏を彼等３人が演奏した所、僕も私もやりたいと言うので、10人程Ａ児のパートを奏するとした所、大変な盛り上がりを見せた。※７

又、音楽活動にはあまり積極的と思われない子ども達が、正確かつ豊かに奏することは、大変な驚きを覚えた。

本題目18（平成５年度）の、年長児ウドン唱歌を視聴して育った６年度年長児。若駒の舞も楽しんで取り組めた。又、唱歌については、音楽に対しても生活全般に関しても、あまり積極的になっていない子ども達にも、大変良く受け入れられている点を、強く感じられた。※８

おわりに

「育」についての実践例として、唱歌その２「若駒の舞」を取り上げた。唱歌はその扱い方にもよるが、一般には音楽に興味を示していないと思われている子ども達にしっかりと支持されていた。※９

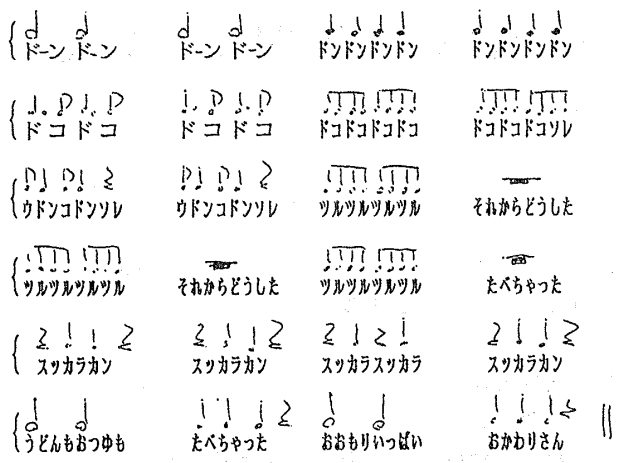
※１　ウドン唱

ウドンコドン唱、編曲：九山靖子・岡ゆかり

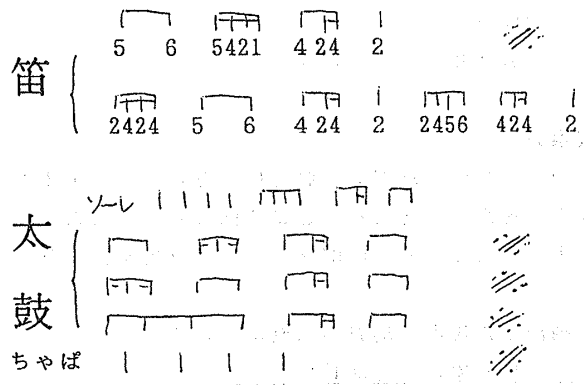
両名は、幼児を対象に“音・動き”遊びで使用。

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education



※2　若駒の舞　　皆川教雄　監修



H６・８月19日～21日

邦声堂　　御岳山　横笛セミナー　横笛友の会

子ども塾　　大里修二　皆川教雄

※3　９月７日　　教師ミーティング

９月14日　　正調　若駒のモデル奏と舞

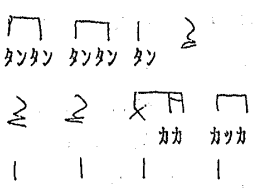
９月21日　　桂若駒の基本モデル出来る

９月27～30日　　運動会に向けての練習

※4　1994年10月21～22日

第５回子どもと音楽フォーラムin名古屋　桂幼稚園

※5　太鼓



笛　　ソプラニーノのリコーダーを使用

※6　Ａ児Ｂ児Ｃ児の男児３名が巧技台でドラムを作り、ばちをブロックで作り、Ａ児が太鼓パートＢＣ児が合いの手の足パート、※５を中心に奏する。ただし子ども流にアレンジされている。以前にこの３名で、太鼓遊びをしていたと思われる。12月15日当日は、担任に“俺達の太鼓を聞かせてあげる”と招待をしていた。

※7　Ａ児パートを「やりたい人」といって、叩かせた。次々に手が挙がり、いつもは積極的でない子ども達までも、僕も私もと手が挙がるので、積極的ではない子ども順にあてたところ、10名全員がＡ児パートをアレンジを加え、見事に奏した。Ｂ・Ｃ児は、合いの手として奏した。

※8　私自身、伝統音楽・民族音楽に20数年身をおいているが、まだ西洋音楽の基盤から抜け出ることは出来ない一面もある。ただ、子どもを西洋音楽の「ものさし」のみで見てしまっては、子どもの音楽の芽を摘み取ってしまうことにもなると、反省させられる。

※9　若駒の舞の教師ミーティング時（※３）、音楽広場（クレヨンハウス・1994年10月号）特集も参考になったが、旋律パートは出来るだけ正調を基とする方が望ましい。笛はしの笛が一番だが、ソプラノリコーダー等はよくマッチする。ちゃぱのパートは、太鼓のパートと同様に打つのだが、４分音符打ちの方が幼稚園・学校では良いと思われる。又、当題目からの実践例を参考にすると、◎YAMA RHTHM MOVING and PARC USSION 1994･11･13スペースゼロ公演◎リトミック徹底研究 1994･12･4主婦会館ホール・幼児音楽研究会等があげられる。ＹＡＭＡは、柳沼輝子が中心となっているグループで、オルフやパーカッションがその基となっているが、その枠から抜け出そうとする努力が見られる。又、リトミック徹底研究では、“本当のリトミックとは”福嶋省吾・“新しいリトミックを体験しよう”猪野純の発表があり、即時反応重視家元的日本のリトミックに対する、問題点・課題が述べられ、猪野の実践ではまさに多分野（クリエイティブドラマ･･･etc）との接点等、日本のリトミックの枠からの、反省と試行錯誤の上での脱却を試みている、素晴らしい実践であり評価したい。即時反応重視は「教」の面が強く、「育」は消えてしまう傾向にある。又、即時反応が速いということが、音楽的能力が高いという誤った考えにつながる傾向もある。即時反応は、即時反応であり、それ以上でもそれ以下でもない。無理に音楽（能力）や音楽（教育）に結び付けようとする所が問題である。

NII-Electronic Library Service